

## 論文の和文要旨

論文題目

周作人と日本古典文学  
——その一九二〇年代の日本古典の翻訳をめぐって

氏名

潘秀蓉

本論文は周作人の一九二〇年代における日本古典文学の翻訳活動を全体にわたって綿密に検討することを通じて、中国現代文学者としての周作人の一側面を明らかにすることを目的としている。

周作人は魯迅の筆名で知られる周樹人の実弟で、現代中国の著名な散文作家、翻訳家、文芸理論家で、現代中国文学の創出に大きな功績を残した人物である。彼はまた日本と日本文化に深く関わった人物で、中国随一の知日家としても知られている。周作人の文学者としての活動の中で、日本古典文学の翻訳と紹介、ことにも彼の一九二〇年代における日本古典の翻訳は、中国の新文学の方向を示したばかりか、彼自身のその後の文学的方向を占める意味でも重要な示唆を含んでいる。これまでの周作人研究には、翻訳の視点から周作人と日本古典との関係を論じたものはまだ存在しない。本論文はその空隙を埋めるべく執筆されたものである。

周作人の文学活動は翻訳で始まり、翻訳で終わり、翻訳活動は彼の全生涯に及んでいる。周作人のこの優れた訳業は、文学者周作人を研究するために無視できない、極めて重要な文献資料である。周作人には「翻訳の半分が創作である」という独特な翻訳観がある。周作人にとって、翻訳とは創作に劣らないほど、重要な意味をもっていた。殊に周作人の一九二〇年代の翻訳は編集部から求められたテーマに即するのではなく、純粹に周作人が自身の趣味から出発するものであり、自分だけ読んだのでは惜しいから、人にも読ませたいという単純な動機による翻訳であったので、この時期の翻訳には彼の当時の思想・趣味などが含まれるのは当然であるし、彼の翻訳の考察を通じて、それを解説することも可能である。そのために、彼の翻訳を論ずることは、重要な作家論にもなると思われる。

中国における日本古典文学の翻訳と研究は、おおよそ一九二〇年代から始められた。周作人はその先達として知られている。周作人は一九二〇年代において自分の趣味に応じて、江戸の俗謡・一茶の俳句・川柳・『狂言』・『徒然草』・『古事記』などを選訳し、さらに、一九五〇年代になってから、『古事記』・『枕草子』・『日本狂言集』・『平家物語』(未完成)・『浮世風呂』・『浮世床』を全訳した。周作人が中国語に翻訳紹介した日本古典文学作品は、上代から近世に及び、ジャンルも詩、劇曲、小説、隨筆から、和歌、俳句、川柳、端唄、都都逸にまで及んでいる。知日家としての周作人が翻訳した日本古典文学の訳文をテキストにし、周作人が日本古典文学をどのように読み取ったか、どのような影響を受けたかを解明することは、新しい視点であり、日中文学を比較する上で大変意義がある作業と思われる。彼の一九二〇年代における日本古典の翻訳は、当時の彼の趣味、

思想、文学観を代弁するものであるばかりか、中国の新文学の創出にも大きい影響を及ぼした。

本論文は全体を二部に分け十章を設け、周作人と日本古典文学の関係を究明しようとするものである。第一部には、周作人の日本古典の翻訳と紹介の視点から、周作人による日本古典の翻訳を考査し、日本古典作品の時代順で周作人と古事記、徒然草、狂言、一茶、俗謡、川柳について一章ずつ詳しく検討する。周作人が翻訳した日本古典作品を中心に、その日本古典の翻訳がどのような契機によって開始され、日本古典翻訳の目的と背景、周作人がその作品をどう見ていたか、彼の翻訳の姿勢を明らかにし、その上で、周作人における日本古典の受容、周作人を通じて、中国現代文学の形成と成長に及ぼした影響を見極めることを目指すものである。第二部では、周作人の日本古典の受容の視点から、その日本古典の翻訳に現れている周作人の女性観、児童観、人生観及び審美情趣を究明し、周作人という人間像の自己形成において、翻訳家周作人から随筆家周作人の形成に、また、周作人における伝統の全面的批判から伝統回帰への思想転換に、日本古典の翻訳と紹介とはどのような意味と意義を有していたのかを考える。

周作人には一九二〇年後半における伝統的中国文化の批判から、その固有伝統価値の重視へという思想的な転換があった。日本古典の選訳時期は、正に周作人の思想転換の前、即ち伝統の全面破壊を志向していった時期であった。周作人の伝統批判の武器となったのは、彼の日本留学中に触れた西洋の近代思潮であった。特に、性心理学と民俗学からの影響が大であった。性心理学は主にハヴロック・エリスのもので、民俗学は主にフレーザー、アンドリュース・ラングらに代表されるものであった。前者によって、周作人は、自分なりの「人間学」理念を樹立し、当時中国社会に勃発した個性開放、自由恋愛、女性解放運動と絡んで、「人間の文学」を提唱し、「礼」の仮面をつけた封建道徳の野蛮、伝統文学の非人間性を強く批判していた。それは彼の生涯に亘って変わらない持論となった。後者により、社会進化や国民性の改造の観点から、神話、童話、童謡、民謡、民間故事、笑い話などに着目し、死に至るまでそれらに興味を持ち続けていた。外国文学の翻訳と紹介は、周作人の文学活動の中に重要な一環であった。旧文学を打倒し、新文学を樹立するため、モデルとしたのは外国文学であったが、周作人は彼の独特な日本文化観によって日本の古典を選んだ。

周作人における日本古典文学の翻訳の背景には、彼における日本国民性の研究もあった。彼は日本古典文学の翻訳紹介を通じて、日本の国民性の長所を自国の国民性の改造の武器にしたのである。周作人は特に日本国民性の長所である「人情美」が現れている古事記を初めとする日本古典文学を多く翻訳紹介した。そこには国民精神の改造や新文明の建設にそれを役立たせようとする彼の意欲が窺われるのである。その外に、民俗学の影響で彼は江戸の庶民文学に多くの関心を寄せていたのである。

周作人における日本古典文学の選訳には、彼の当時の思想、主張、文学の趣味が鮮明に現れていることが分かった。周作人が選訳した日本古典の作品には、当時彼が提唱していた「人的文学」「平民文学」に合致しているものが殆どである。周作人における和歌、俳句、俗謡、川柳などの翻訳と紹介は、中国の新詩—白話詩の運動に結び付いている。狂言と江戸の庶民文学の翻訳と紹介は彼の「平民文学」の主張に関わっている。周作人は『徒然草』の恋と女性に関する段と「古事記の中の恋愛物語」を翻訳したことは、当時周作人が力を

入れて婦人解放、自由恋愛を提唱したと深く関連している。彼は『枕草子』の第百三十六段を抄訳し、一茶の俳句と俳文「おらが春」を選訳紹介したことからは、児童を詠える文学を提唱しようという動機や彼の児童観が窺える。更に、これらの日本古典殊に徒然草の選訳からも彼の人生観たるものを明らかに反映していることが分かったのである。彼の一九二〇年代の半ばにおける伝統批判から伝統回帰への思想転換に、日本古典文学ことに徒然草からの影響も無視できない。

周作人の一九二〇年代における日本古典の翻訳は全て現代白話文を用いて「直訳」の方法で訳出しているのである。彼は翻訳作業に入る前に、翻訳によるテキストや注釈本をできるだけ多く集め、その中から自分の好みに合うものを選択して底本にする特徴があるので、彼のその翻訳姿勢からも彼当時の思想・趣味などが窺える。例えば、徒然草の翻訳の場合、通行している注釈書のみならず、自分の好みに合う個性的な注釈書を参考にし、他者による訳文と異なる個性的な訳文にした。それは当時の周作人の自由恋愛、婦人解放などの主張にその原因があることを明らかにした。彼は注釈書の選択により、新たな兼好像を作り出し、「翻訳の半分は創作である」ことを証明した。

最後に、周作人の一九二〇年代における日本古典文学の翻訳には、彼の人生観・女性観・恋愛観・児童観などが現れているばかりか、その翻訳活動は彼の作家形成にとっても大きな意義があったのである。一九二四年から文芸理論家、翻訳家としての周作人は、散文作家としての周作人に取りかえたことは、日本古典からの影響が窺える。現代中国独歩の周作人の散文に現れている独特な風格や審美情趣は日本の色が濃い。彼は俳諧から閑適、簡潔、含蓄、滑稽、人情美などの要素をその散文に取り入れていたことが分かった。